酒井理一郎
～織物への飽くなき挑戦～

酒井理一郎
（1844～1922）
出典：酒井真一郎『夏木園について』

酒井理一郎は、江戸時代末期の弘化元年（1844）、尾張国丹羽郡多加木村（現一宮市）で生まれた。安政の開国以降、海外から新たな素材、機械、技術が流入し、各地の織物産地でさまざまな取り組みがなされるなか、19歳で織物業をはじめた理一郎は61歳ごろに倒産するまで、情報の収集と新製品の製出につとめた。

明治10年（1877）に瓦斯糸（がすいと）という綿糸の表面を炎で焼き払った光沢に富む細糸が輸入されると、明治18年ごろ理一郎は、経緯糸（たてよこ）に瓦斯糸、縞筋に絹糸を用いた「羽二重縞（はぶたえじま）」を創出した。すると、これに影響を受けた者が続出し、数百種の新製品が織り出されたという。

明治24年に濃尾震災の復旧工事で岡崎の大工が「バッタン」（飛杼装置）を製造すると、理一郎は他の機業者と争うようにこれを導入し、また京都西陣で複雑な紋様が織り出せるジャガード機を見ると、西陣から職人を雇い入れ、綿風通織を織った。

明治25、26年ごろ、理一郎は、他の機業者とともに横浜の外国商館から毛糸を入手し、毛織物の国産化に取り組んだ。結果的には整理がうまくできず製造は失敗に終わるものの、理一郎らの取り組みは毛織物製造の先駆けとなった。

その後の明治35年ごろ、海東郡津島町（現津島市）の片岡春吉は着尺セルの生産に成功する。理一郎、春吉ら先覚者の取り組みは、愛知県西部地方が国内最大の毛織物産地まで発展していく契機となった。

酒井理一郎の織物工場　（明治 21 年『尾陽商工便覧』）　出典：酒井真一郎『夏木園について』

参考文献：酒井真一郎『夏木園について』、森徳一郎『尾西織物史』、
「明治三十四年農商工業功労者調査」（一宮市『新編一宮市史』資料編十三巻所収）ほか